

「一つの中国」を疑え

日中国交正常化50周年、何がめでたい。日本統治時代の50年を含め、同じ価値観を共有する台湾とは120年を超える交流がある。石原慎太郎氏も生前、台湾との絆を大切にしていた。いまこそ日台関係を見直すべきときだろう。

「一つの中国」なる原則を叫び「台湾は中国の一部」だと中国は主張するが、実際のところはどうか。拓殖大学顧問の渡辺利夫氏が、50年前の日中共同声明にさかのぼって「一つの中国」はあくまでも中国側の主張であって、日本はそれを承認も同意もしていない事実を詳説している。あわせて、権威ある辞典であるはずの「広辞苑」の怪しげな記述もバ

■いまこそ日台関係■

ツサリ斬り捨てた。

旧ソ連・バルト三国の一つリトアニアは親台湾政策を掲げ、中国と真っ向から対決するに至っているが、その背景を産経新聞の三井美奈パリ支局長が解説。国連を脱退し、ユネスコも未加盟の台湾に



は世界遺産が現状ゼロだが、世界に誇れる景観が多数あると、作家の平野久美子氏は「台湾世界遺産登録応援会」の顧問として後押ししている。

李登輝元総統をはじめ日本や台湾の発展を支えた多くの人材を輩出した旧制台北高等学校は、今年で創立100周年。卒業生は台湾の内と外から、戦後長らく国民党一党独裁だった台湾の民主化に努め、ついに実現させた。台北高校のモットー「自由と自治」を今、まさに台湾自体が実践していると、台湾独立建国聯盟日本本部の王明理氏が紹介。近年、注目を集める半導体メーカー「TSMC」は、実は台湾が生き残るために創った国策企業なのだと『国会議員に読ませたい台湾のコロナ戦』著者、藤重太氏が明かす。産経新聞の河崎真澄特別記者は、台湾人の日本への好意に甘えるばかりではないと苦言を呈する。(溝上健良)